【資料紹介】

【翻刻・解題】原豊二氏所蔵 門脇重綾自筆和歌詠草掛軸

渡邊　健
（米子工業高等専門学校）

摘　要

ここでは、原豊二氏の所蔵する門脇重綾自筆和歌詠草掛軸を翻刻、紹介する。これは、幕末・明治維新期に鳥取藩・明治新政府に仕え活動した国学者・神祇官僚の門脇重綾自筆の和歌詠草から抄出し軸装されたものである。重綾には家集『蠖園集』があるが、本人の死後、他者の手によって編集された他撰家集であり、その原資料や編集過程については不明な点が多い。今回紹介する資料は歌数五二首と数は少ないが、本人自筆の資料であり、『蠖園集』の成立過程について考える上で重要な資料である。

キーワード：門脇重綾　自筆和歌詠草　蠖園集　幕末・明治維新期の和歌

はじめに

今年（令和四年、二〇二二年）は、幕末・維新期の鳥取の国学者・歌人である門脇重綾（文政九年〔一八二六〕～明治五年〔一八七二〕）の没後百五十年に当たる。六年前の平成二八年（二〇一六）には、生誕百九十年を記念して、門脇重綾の出身地である境港市の市民からなる「境港歴史楽会」（古文書の会）が、それまで活字化されていなかった重綾の家集『蠖園集』を翻刻・出版し[1]、当時の新聞記事でも取り上げられるニュースとなった[2]。稿者はこの翻刻に監修という形で協力していたが、歌人としてはほとんど知られていない門脇重綾が、和歌、特に長歌に優れた資質を持つことに感銘を受け、その長歌の表現の特質を考察した論稿を公にした[3]。

この『蠖園集』は、重綾の死後に他者の手により編集された他撰家集であり、重綾の和歌の全てを収めているわけではない。現在、門脇家が所蔵する重綾関係文書の中には、重綾自筆の『西遊紀事』に六三首、『禁裏学習院建白書並幕末詠歌』に八六首、また重綾の死後にまとめられた『原本　門脇重綾事歴』に四四首の和歌（長歌を含む）が

収められ、そこには家集に見えない歌も多く含まれている。[4] 門脇重綾が幕末から明治維新期にかけて鳥取藩、新政府に仕え、幕末の政局や明治初期の宗教政策に大きな役割を果たしたことを考えるとき、その人物や思想、私生活を知る手がかりとなる和歌や詞書が幕末・維新期の歴史・文学資料として大きな価値を有することは疑いなく、今後はそれらのうち、活字化されていないものを中心に翻刻・紹介の作業がなされるべきであろう。

さて、ここで家集以外にまとまった形で残っている門脇重綾の和歌資料として、本山陰研究プロジェクト研究員で、天理大学教授の原豊二氏ご所蔵の門脇重綾自筆和歌詠草掛軸がある。これは、六年前に稿者が『蠖園集』の翻刻協力をしていた頃に、原氏にその存在を教えられ現物を閲覧させていただいたもので、氏は米子市内の古物商から入手されたとのことであった。一見して、『蠖園集』にない歌も多く収められており、重綾の和歌の全体像を知る上でも重要な資料だと思っていたが、その後、原氏自身には資料紹介のご予定はないとお聞きし、重綾没後百五十年という節目の機会に活字化して公にするのも意義のあることと考え、改めて撮影・調査をさせていただいた上で、氏の許可を得て以下同資料を紹介することとする。

解題

(1) 書誌等について

【書誌】

所蔵者整理書名「門脇重綾自筆和歌詠草掛軸」

外題　「門脇重綾翁遺稿竪幅」（箱外題）

記載著者名　門脇重綾 書

形態　一軸、二〇二糎　箱入（桐製）

書写／成立年次　幕末～明治四年頃写

所蔵者　原豊二氏

書かれた時期・機会の異なる二種類の門脇重綾自筆和歌詠草から短歌・長歌合わせ五二首を切り貼りして軸装にしたものである。表装は、丸表具、耳折り布表装、無地柳色で縦二〇二糎×横六七・八糎、本紙縦一四三・二糎×横五四・三糎。横幅は五四・三糎で揃えられているが、本紙は軸装にするために重綾の和歌詠草を六段に分けた上で、各段の上下を繋いで一枚とし、細い金の裂地で筋廻しを施している。各段の縦の長さには違いがあり、一段目二四・七糎、二段目二五糎、三段目二五・四糎、四段目二五糎、五段目二一・四糎、六段目二一・二糎。一～四段目は楮紙無地の料紙、五・六段目は青色の縦罫線を引いた楮紙の原稿用紙（和紙に木板刷り）に書かれており（写真1・2参照）、それぞれ異なる時期・機会に、重綾が自分の詠歌をまとめた草稿が原資料であったと推測される。

なお、六段目の最後に自署「門脇重綾」と、自号「蠖園」の押印があるが、それぞれその部分だけが切り取られて掛軸の本紙最後の位置に貼付されている。ただし、この自署も本紙の和歌・詞書も筆跡からみて重綾本人のものであり、本資料を重綾自筆資料として扱うことに支障はない。

(2) 軸装前の原資料について

先述したように、この掛軸の本紙は第一～四段目と第五・六段目で料紙が違い、両者は別の時期・機会に書かれた和歌詠草とみられる。

以下、前半・後半と称するが、そのどちらにも折目の跡が残っていることから（後半は原稿用紙の魚尾に折目がある）、原資料の形態は袋綴の冊子であった可能性が高い。そしてこれらは、軸装される際、原資料から歌が適宜切り出されて継ぎ貼りされたことが、視認できる紙の継目から推測できる。二段目を例にとるのが分かりやすいが、ここでの紙の継ぎ方は、

二段目

5春橋・6春杣・7春林・8春寺・9山家春　　」（継）

10夏月・11夏残月　　」（折）

12蛍・13午睡　　」（継）

14浦月・15松間月・16浦月・17 18秋雨・19幽居月　　」（継）

20 21初雪　　」（継）

22無題

となっている。このように二段目は、春（5～9歌）、夏（10～13歌）、秋（14～19歌）、冬（20・21歌）の順に四季の題詠歌を原資料から切り出して貼り継いだことがわかる。なお、22歌は「花とのみけさ降る雪のまがはずはきのふをこぞとへだてましやは」という立春の歌で[5]、四季の後で再び春が巡り来るという構成を意識したか。このことから考えると、原資料には、今知られるよりも多くの重綾の歌が収められていたようである。

また、原資料の成立時期についてであるが、和歌の詞書の記載内容等から、詠歌時期の特定できるものがある。まず前半（1～32歌）は、1歌が『類題稲葉集』（嘉永五年〔一八五二〕編集了、安政三年〔一八五六〕刊）に入集するので、嘉永五年以前の作。24歌は詞書に「加茂行幸」とあるのが文久三年（一八六三）三月、孝明天皇の賀茂社行幸をさすと思われる。23歌・28歌・29～32歌は、詞書の内容から文久三年八月十八日の政変と翌日の七卿落ちをさすことが明らかである。こうして、前半は重綾が嘉永～文久頃にかけて詠んだ歌を、文久三年八月以後に自ら選歌し、整理した詠草であったのではないかと思われる。

一方後半（33～52歌）は、33歌（詞書に「安政五年（一八五八）の三月ばかり」とある）のように幕末の歌を含むものの、所収歌の多くは維新後のものである。詞書から時期を特定できる主なものを挙げると、38歌詞書「従五位下宣下をかゞふりける時」、39歌詞書に「太政官代にめされて内国事務権判事といふに補せられける時」は維新直後の慶応四年（明治元年、一八六八）、門脇重綾四十三歳の作である[6]。42・43歌詞書に「諸侯版籍奉還の奏聞」とあるのは明治二年（一八六九）、44歌詞書には「明治四年元日試筆」とあり、45・46歌詞書「貴賤迎春　御会始」とあるのは明治四年（一八七一）の宮中歌会始の折の詠である[7]。以下、51・52歌（詞書「花下言志　上巳御題」までは明治四年の歌が収められているとみられ[8]、後半の詠草がまとめられたのもおそらく同年中のことと考えられる。（重綾は翌明治五年に亡くなっている。）

(3)他出文献について、本資料の価値

本資料の他に、稿者が現在確認している門脇重綾の和歌を収める主な資料と、その所収歌数を挙げると次のようになる。[9]

・『蠖園集』（門脇家蔵）　二二二首
・『西遊紀事』（門脇家蔵）　六三首
・『禁裏学習院建白書並幕末詠歌』（門脇家蔵）　八六首
・『原本　門脇重綾事歴』（門脇家蔵）　四四首
・『類題鰒玉集』六篇（嘉永六年・一八五三刊）一一首、七篇（嘉永七年・一八五四刊）二四首
・『鴨川詠史集』初編（嘉永六年・一八五三刊）一首、二編（安政二年・一八五五以前脱稿、大正二年・一九一三刊）四首
・『類題稲葉集』（嘉永六年・一八五三編集了、安政三年・一八五六刊）一〇首

重綾の和歌にはこの他にも、短冊等で伝わるものが若干あるが、今は取り上げない。以下、本資料の他出文献についてその状況を一覧にすると次のようである。（以下、『禁裏学習院建白書並幕末詠歌』→幕末詠歌、『原本　門脇重綾事歴』→重綾事歴、の略称を用いる）

【他出の状況】

1蠖園集一五一。類題稲葉集・長歌。
5蠖園集五五。
7蠖園集四二。
8蠖園集五四。
9蠖園集四七。
14蠖園集七八。
16蠖園集七七。
17蠖園集七五。
19蠖園集七九。
20蠖園集八九。
22蠖園集一。
23幕末詠歌。重綾事歴。
24幕末詠歌。重綾事歴。
25幕末詠歌。
26蠖園集一九一。幕末詠歌。重綾事歴。
27幕末詠歌。
28重綾事歴。
29幕末詠歌。重綾事歴。
30幕末詠歌。
31重綾事歴。
32幕末詠歌。
33蠖園集一六八。
34蠖園集一六九。
35蠖園集一七七。幕末詠歌。
36幕末詠歌。
37蠖園集一七八。
39重綾事歴。
40蠖園集一九二。
41蠖園集一九三。
42蠖園集一四八。

『蠖園集』との共通歌が一九首で最も多く、『幕末詠歌』が九首、『原本　門脇重綾事歴』七首、当時の類題和歌集に入集した歌は、『類題稲葉集』の一首のみである。これらを除いた二二首が本資料だけに見える歌となるが、特に明治四年一～三月の詠とみられる44～52歌は御歌所での御歌会始や月次会の折と思われる歌を含み、歌人としての門脇重綾の履歴を考える上で重要である。

一方、他出文献と比較するとき、本資料によって家集『蠖園集』所載の歌や詞書の本来の形が推定できる場合がある。例えば、本資料33「謁　瓊子内親王廟作歌」の長歌は、「高倉の　笠置の山は　大八洲おほはざりけむ　ゆゝしきや　吾大君の　大御舩　荒海に漕出～」と始まり、五十五句から成るが、家集（一六八）では傍線部の冒頭の四句が欠けている。また、本資料26・27歌「招魂名簿歌幷序」、35・36歌「秋日過名和村荒墟悵然作歌一首並短哥」の長歌はそれぞれ家集では一九一、一七七に該当するが、家集では反歌を欠く（『幕末詠歌』にはどちらにも反歌がある）。これは本資料と『幕末詠歌』のように、反歌を伴うのが本来の形だったと思われる。

今回その詳細は示せないものの、家集と本資料の間には和歌・詞書に本文異同が少なからずあり、また本資料と『幕末詠歌』『原本　門脇重綾事歴』に収められた歌・詞書の間にも小異がある。もともと『蠖園集』は他撰家集であり、依拠資料や編集の過程が詳しく分からない作品である。門脇重綾の和歌を知る上で、家集だけを見るのでは不十分であり、誤った理解をする可能性もある。

『蠖園集』の序文には、重綾と生前公私にわたって親交のあった飯田年平が、「こたびむす子重雄に、この巻を板にゑらむとして、下書を見せにおこせけるを、かず〳〵撰りさだめてかへしおくる序に、巻のはしにかく一言をそへつ　明治十年十二月」と記しており、門脇重綾の逝去から六年を経て、息子の重雄が『蠖園集』の下書を作成し、飯田年平が選歌したという家集の成立の経緯が知られる。また、『原本　門脇重綾事歴』には、「重綾没後、明治十年、嗣子重雄父ノ詠歌ヲ集メテ飯田年平、宮原積両氏ノ校閲ヲ経テ之ヲ出版シ、書目ヲ蠖園集ト題ス。其ノ当時有栖川熾仁親王殿下ヨリ雄渾典禮ノ四大字御染筆ヲ下賜セラルゝニ依リ之ヲ題字トナス。」とあり、『蠖園集』が飯田年平・宮原積の「校閲」を経て成った事情が示されている。この両者のうち、特に飯田年平は幕末の鳥取を代表する歌人・国学者であり、和歌関係の著作も多く歌道については独自の見識を有していたとみられる[10]。われわれが現在、門脇重綾の和歌を読む際にまず拠り所とするのは家集『蠖園集』であるが、上述したようにこれが他撰家集であり、飯田年平による校訂の手が加わっている可能性を考慮に入れると、稿者が今回紹介したような、重綾自筆資料の本文が比較対照して参考にされることが望ましい。今後稿者も、門脇重綾の詠歌集成に向けて資料の調査・活字化に取り組んでいきたいと考える。

注

（1）『門脇重綾遺稿歌集『蠖園集』―翻刻―』（境港歴史楽会、平成二八年一一月）。

（2）『日本海新聞』平成二八年一一月九日一七面「広域」記事「門脇重綾の歌集活字化」。

（3）拙稿「門脇重綾と和歌―その長歌の表現の特質―」（『岡大国文論稿』第四五号、平成二九年三月）。

（4）門脇重綾関係文書は、現在は重綾の玄孫に当たる重仁氏が所蔵。『西遊紀事』は『名和町誌』（名和町役場、昭和五三年七月）に活字化されているが、『禁裏学習院建白書並幕末詠歌』『原本　門脇重綾事歴』はまだ翻刻・紹介されていない。

（5）この歌は重綾の家集『蠖園集』では詞書「元日の朝、まだきより雪いたく降ければ」として春部冒頭に置かれており、立春詠である。

（6）『重綾履歴年表』『教部大丞重綾履歴年表』（門脇家蔵）等による。

（7）明治四年（一八七一）一月の宮中歌会始の題は「貴賤迎春」であった。恒川平一『御歌所の研究』第二編「明治以後の御歌所」第四章「歌御会始」第五節「御題並所役名」（還暦記念出版会、昭和一四年六月）参照。

（8）たとえば47歌（詞書「参議真臣を悼む哥」）は、明治四年一月に参議・広沢真臣が暗殺された折に詠まれたものとみられる。

（9）門脇重綾の和歌に関する資料は、それぞれ以下を参照した。

・『蠖園集』　注（1）『門脇重綾遺稿歌集『蠖園集』―翻刻―』。歌番号も同書による。

・『西遊紀事』『名和町誌』（名和町役場、昭和五三年七月）

・『禁裏学習院建白書並幕末詠歌』　門脇家蔵本

・『原本　門脇重綾事歴』　門脇家蔵本

・『類題鰒玉集』『鴨川詠史集』　朝倉治彦氏監修　中澤伸弘氏・宮崎和廣氏編『類題和歌　鰒玉・鴨川集一～六』（クレス出版、平成一八年四月）

・『稲葉和歌集上・下』米子市立図書館蔵本　Y九一―一二七―一

（10）飯田年平は文政三年（一八二〇）～明治一九（一八八六）、江戸時代末から明治にかけての歌人・国学者・神祇官僚。家集『石園集』『続石園集』の他、『万葉集短歌』『石園歌話』等の和歌に関する論考や注釈も多い。

【翻刻　原豊二氏所蔵　門脇重綾自筆和歌詠草掛軸】

凡例

一　底本には、原豊二氏所蔵資料を用いた。

二　翻刻に当たっては、原文の表記を尊重したが、最小限次のような処置を行った。

1　各歌の歌頭に算用数字で通し番号を付した。

2　読解の便宜を考慮して濁点・句読点を施し、適宜改行位置を改めた。

3　長歌は各句毎に一字分のスペースを空けた。ただし、歌番号1～4の長歌は、底本では各句毎に朱で読点が施されているため、それを「、」で表記した。35・37の長歌は偶数句と最終句に朱で読点が施されているため、それを「、」で表記し、奇数句毎に一字分のスペースを空けた。

4　漢字の表現は、原則として通行の字体によった（俗字や略字は原則として用いない）。ただし、旧字・異体字などを部分的に残す（「寐・烟・縣」などはそのままとする）。指示語や助詞・助動詞などの漢字もそのまま残した（「此」「哉」「也」など）。

5　読みが難しいものに限って、最小限、漢字または漢語句の右傍に（　）を付し、平仮名で読みを施した。なお、1～4歌は万葉仮名を模した漢字表記がなされており、そのままでは読解が困難であるため、私意によりすべて平仮名で訓みを付した。（1歌のみ、『類題稲葉集』下巻、長歌の部に同じ歌が見えるため、それを訓み方の参考にした。）

6　繰り返し記号「ゝ」「〳〵」は原文のままとしたが、濁音はそ

れぞれ「〻」「〳〵」で表記した。

7　見せ消ちは底本では訂正する語句の左側に抹消記号「ᘐ」を付し、右側に訂正後の文字を本文よりやや小さく示しているが、本稿では見せ消ち部分はすべて二重抹消線で示した。また、語句の挿入の指示は〔　〕を付けて示した。

8　翻刻の都合上、題・詞書・左注は底本の記載形式に関わらず、和歌より二字下げとした。

9　読解困難な箇所は「■」で表記した。

10　解題に記したように、本資料は元来袋綴であった冊子から、和歌を適宜切り貼りして製作されたと考えられる。そこで、本資料の中で張り継ぎや折目の確認できる箇所について、括弧内に（継）・（折）と記して示した。

〔門脇重綾詠草　翻刻〕

【一段目】

1　鶴

栲綱之、白伎御衣乎、真具爾、伊取装弖、高行也、鶴云鳥者、瓢形乃、日少宮従、神下、使在鴨、葦原之、瑞穂乃国袁、妥国止、国覓通、萬代袁、壽謡良斯、千世袁社、立儛良自伎、朝目吉、見良玖嬉伎、天乃鶴群、

亀

2　常世濤、彌若還、荒磯磐、益栄乍、波乃共、■■■　」（継）

浪、撓眉引、咲麻我利、童女佐備而、世乃人爾、遇止不言哉、宜名〻、今母逢套毛、綿津見之、宮路覓得弖、神宮乃、妙殿爾、夢乃間母、千歳経奴云、烏玉之、一夜寝右軍願、■■甘美童女與、

松

3　天曽〻留、遠乃高嶺爾、白雲袁、冠止着、翡翠鳥乃、青御衣袁、取装、笻衝松者、千歳爾、老爾有鴨、百年爾、老弖者雖有、空母、然老倍斯耶、玉垂乃、小津之御崎爾、御佩乎、挂弖護比、何甲乃、戒之国王母、厥蔭爾、両立巳都、然礼社、宜裳貴伎、愛紀也斯、此玉松者、百八十之、

」（折）

木〻云木〻爾、勝弖有鳧、

萬歳歌

4　穴楽、阿怜面白、正月立、春斯来奴禮者、物皆者、愛有氣利、事業者、神佐備爾乍、百千足、家庭悉、御注縄連■、弥遠長爾、松竹乃、枝母茂佐日、栄行、大御世須良乎、萬歳止、其屓弖、立儛留、翁之友者、嬉支乎、畏袂毛、漸大爾、看良玖寛玖、打鳴留、皷乃音母、弥亮爾、聴久宜、御民吾、活甲斐有、安御世之、幸有鴨也、嗚呼其、幸無時乃、乱世之、古昔念者、其之家乃、業毛不為而、入紐之、同族毛、真神成、敵見遇管、去鳥乃、争■■来者、御民等者、方便母方便無、家爾陀爾、妥者不住、老人毛、道爾吟、飯須良者、炊由无、稚子者、飢弖臥在、宜斯社、是

」（継）

乃世中、常世行、時爾者在氣米、雖然、天津神王之、神議、肇賜斯、神国之、本乃手振止、年之端爾、弥立還、初春乃、千代之壽言、宜奈敝、立儛見者、神世斯所偲、

【翻刻・解題】原豊二氏所蔵 門脇重綾自筆和歌詠草掛軸（渡邊　健）

七七

【三段目】

春橋

5 山ぶきの八重さくやどのいさら川うちはしわたしまつ人や誰

春杣

6 時しらぬ雪こそにほへ杣山の遠の下枝に斧やふれけむ

春林

7 江林の寐ぐらの鷺のあらそひにみだれてさけるふぢなみの花

春寺

8 山寺のはるこそものはあはれなれかすみにとづる入相の鐘

山家春

9 谷川のしがらみこゆる花はあれど春のゆくへをとふ人もなし　」（継）

夏月

10 風まつとたえまもおかぬ白妙の扇のつまに月ぞにほへる

夏残月

11 音たてしくゐなやいづらむぐらふの門たがへせしけさの月影　」（折）

蛍

12 蓮とると子らがきほひし池水にくるれば即てとぶほたるかな

午睡

13 なく蝉の在かさだめずたどるかな風の上なるうたゝ寐の夢　」（継）

海上月

14 海美の神のほくらにいつくとふ白玉はやしてる月よかも

松間月

15 松かげの砂がうへもてる月のくまなきからにあかずこそゆけ

浦月

16 うらちどり立ゐの波のをちこちにみだれてさむき月のかげかな　」（継）

秋雨

17 山縣にゆふ日のかげはさしながらふる雨さむし柿の下庵

18 もずのなくをばなが末の秋風にむすぼゝれてもふるしぐれかな

幽居月

19 何ばかりこゝろのくまの有がほに木がくれおほき月を見るらむ

初雪

20 大神ははつゆきふれりをすゝきのたもとよりこそ秋はくれしか

21 しらぎくのにほふ垣根をふもとにてはつ雪さむし大神の山　」（継）

22 花とのみけさ降る雪のまがはずはきのふをこぞとへだてましやは　」（継）

【三段目】

十八日、御門にはいとおもひの外なる事いで来て、よの中あらぬさまになりぬるに、聞ゆるにつけて何くれとおもひつゞけける歌ども　」（継）

23 なか〳〵に花うぐひすの春ならぬこゝろづくしはかひも有じを

こぞいとかしこけれど、此春加茂行幸の時よませ給ふ御製をおもひ出るによりてよめるなり

24 いでましの其かみ山のあふひ草かけしたのみは何かれぬらむ

25 有しにもあらぬくもゐのそれながらいかに月日はうつりゆくよぞ

」（継）

招魂名簿歌并序

招魂名簿は建仁寺清住院主のものせしにて、近き年、尊皇攘夷の事につきて身うせたる諸人の姓名をいや継ゝしるして、それが後のまつりの為にとてするわざなりとぞ。某の年某の月日云々のよしにて、身うせたるよしまでつばらかに記したるはいとも〳〵ねもころにいそしきわざにて、或は荒野にたふれ、あるは獄屋に

」（継）

隘られ、げに其魂のよるべもなく、其家人にすらいかに成けむとも知られぬを、かくつばらかにものしたるは、亡魂の為はさらにもいはず、こをもて諸人をだしき道にすゝむるたづきといはむも中ゝなり。佛のをしへにはこよなくまさりて、いとめでたき主のいさをしにこそ是がはし書に一首をもと乞はるゝままに

26 天地の　なしのまに〳〵　人皆に　ちはふみたまは　神ながら清くしあらむを　降ち世の　人草ならひ　いかさまに　けがれにけらし　其みたま　塵もけがれず　君の為　よの為のみと　剣太刀　身を尽しけむ　桜田の　ふゞきのみだれ　晴間えし　空とも見えず三かさ山　行幸のみさき　まちかてし　ゆくへもしらに　筑波山葉山しげ山　おもひかね　入にし人も　末つひに　越路の雪の　下消えに　消えかへり

」（折）

つゝ　よしといふも　あしとしこぢて　たてぬきに　根はふしこ草よの中の　跡さへぬれや　其草の　もとかりたつと　玉敷の　庭におりたち　焼がまの　とぎしこゝろは　くもり日の　はれぬ雲ゐにうらみわびて　天翔るらむ　もろもろの　清きそのたま　玉きはる命死ぬとも　天地と　共にうせめや　うせずのみ　しかしもあらむを　在つゝも　かひもなきよの　しかすがに　うつろひゆけば　春花に　そゝくなみだを　朝にはの　露と手向て　秋草に　むすぶなげきを　夕庭の　阿伽とまつらひ　ねもころに　しるす名づきぞ見らく悲しき

反歌

27 御たみわれいけるしるしなし天地につひにそむかぬ名をしとめばや

【四段目】

寃疏再之上　闘而不達讒　誣称為要請遂将逆却追討期以八月十八日於是伏水山崎嵯峨三方所屯聚之義絶不堪憤懣即日暁天大挙詣闕擬清　側而堺町蛤中立賣三門攻撃乱砲苦戦遂陥于敵中敗潰不得志然而歃放礫焼京中凡自十九日至廿一日炎煙漲天都下為平原郊野臨之啼泣悲慟以賦一首

28 空美都　倭の国の　青丹吉　奈良の京を　かしこくも　行幸しまして　天知や　日月の御旗　打靡く　御稜威の光を　をさかりにかゝやくみむと　仰見る　空やも

」（継）

へだつ　俯をがむ　地やもわかつ　大御輿　たゝずて遂に　雲の上は　わづきもしらす　おぼゝしき　此のよの中　裏うへに　移ろひゆけば　大夫の　臣の武雄等　かしこみて　をゝぐをしらに　慎みて　在らくをしらに　おやし緒に　玉の緒つらね　よしゑやし　く

だけば砕け よしゑやし たゝば断なむ 御門へに うたひてまし
と 息どほる 胸走火を かへらまに いかに焼てか 禍津日は
荒びにけらし たふれたる おそのねぢけら 八衢に 烟くらまし
たてぬきに 焔を巻て なゐがゆり しかうつ玉は こゝだくも
たばしり乱れ 百千足 家庭悉 燃る火の ほ中にたちて 泣叫ぶ
声もたゞよひ うつそみの 世かも盡ると 見るが中に 荒野と成
し これの此 平のみやこ 今しばし いかにかならむ あはれ其
みいつの光 常晴と おもひさだめて 二世行く けふのうき世を
見らく悲しも

」（継）

いにし甲子の水無月よりことし三とせのほど、見る〳〵世の中のうつりかはり行くにつけて、いぶせく息どほろしき事のかぎりなるを、年ごろしたしく物しつる国々のしる人も、或は軍に討死し、あるは義の為に死し、あるは日の光みぬこのよの外におしこめられたるなど、数しらず大かたおよびをる斗もあらず成ぬるを、かくて有ふる命も今は何の為にかとて、我からうとましき折さへあるを、さながら此ごろのよの常なる嫌疑とかやいふらん事にてか、あからさまに国にかへるべき事と成にたるが、十月廿七日の夜なりけむ、山科宮正親町三条殿などをはじめ、正議の公卿廿四人俄におしこめられ給へると聞ゆ。さいつころ御門には、ここらの大名たちをめさせ給ひ、あまねく天下の公論をまたせ給ふべきよし、徳川中納言殿申されし

」（継）

よしなれば、年頃には引かへたるよのさまにも立かへるべきにやとたのもしげなりつるも、又かくあらぬさまになりにたるを、いかゞはせん、今はなげきも中ゝながら、かくて見果ぬみやこのさまのかにかくにかゝづらはしきに付て、在しみとせがほどの事ども、来しかた行末かけておもひつゞけらるゝまゝによめる歌ども

29 ひま見えぬさぎりが上に天津日も有としきかば何かなげかむ
30 言挙も何かはいはむ天にありてきゝわく神のあらばこそあらめ
31 さかしらに言挙なせそますらをのをばしのつるぎいざこゝろみむ
32 大ひえの峯のしらくもいつまでか人だのめなる世にかゝるらむ

【五段目】

謁 瓊子内親王廟作歌

元弘二年三月後醍醐天皇隠岐国へ遷ろひましゝ時、皇女竊に三位局のめのわらはにまじらひ伴なひまし〳〵、車尾村深田某が家にとゞまり坐ける間に、御ともの武士どもかしこくも皇女を見あらはしまつり、此より天皇をはなち奉りて、御舩つひに隠岐へわたらせ給ひにけり。皇女後に深田某が家にて御髪下させたまひ、安養内法親王と申て、山市場村なる安養寺にすませ給ひ、延元四年八月一日此にてつひに隠ましけるになむ。抑皇女の御うへの事はさらなり、御父天皇同月の十六日に吉野の行宮にて崩御まし〳〵ける事をさへおもひあはせけるに畏くも悲しくも言にいでゝいはむはなかゝなるべし。即其の御墓に詣て、

」（折）

よめる時は安政五年の三月ばかり

33　高倉の　笠置の山は　大八洲　おほはざりけむ　ゆゝしきや
吾大君の　大御船　荒海に漕出　わたのはら　八十島かけて　はろ〳〵と　うつろひまさむと　くさまくら　たび行しらず　玉匣　會見縣の　かり宮に　かりゐしませば　はぐゝもる　田鶴のつばさの　おほひ羽の　いつこもりてか　しら玉の　光見えけむ　真玉為　みこのみことを　うれたくも　そこにはふらし　吹はなつ　あしたの風に　大君は　船出しましぬ　おひしかむ　すべだにしらず　とゞまらむ　たどきもしらに　やつれにし　其の衣手も　時自久に　かはく時なく　南ふき　北ふきかはり　みよし野の　あら山中に　わたる日の　くれゆくそらも　てる月の　くもかくる成　なにしかも　まさかを知て　ながきよに　かくりましけむ　是のこの　宇豆の玉殿　みれば　」（継）

かなしも

34　あと、へばやへむす苔のひとへだにこゝろもとけずいにしへおもほゆ

秋日過名和村荒墟悵然作歌一首並短哥

35　大魚乃　可ゝ呑海の、荒汐に　み空をひたし、天傳　日のめもみせず、常暗と　成にし時に、名和の海の　ありその上に、在たゝし　めしたまひけむ、遠津神　吾大王の、かしこきや　みことのまにま、まつろへる　益荒武男の、家村を　焼と焼つゝ、天そゝる　三船の上の、天雲を　ほのほにこがし、天の下　既におほひて、いちはやく　立し　」（継）

いさをは、萬世に　千代に尽めや、萬世に　千代にしあらむと、天津水　仰てまゆ（ちし）は　いでましの　山越の風の、とこしくに　ふきはすゝまず、故郷と　成しをかべは、焔かも　いまも燃らし、さにつらふ　秋の黄葉の、いにしへに　しかもこふらく、うらぶれて　こがるゝ色を、みればさぶしも

反歌

36　もゝちたびみらくかなしき秋の日の夕日になびく船上の山

名和長年佩刀歌

37　大王の　詔畏み、益荒雄の　磨し心を、天地に　うけひて有けむ、剣太刀　光かゞよひ、青雲の　たなびく日すら、時となくひさめふるらし、氷雨降る　三船の上の、山風に　なびきうらぶれ、翅成　在かよふらむ、荒みたま　今の現に、床のへに　」（継）

然しもまつらむ、其横刀あはれ、

従五位下宣下をかゞふりける時

38　咲花の木末をだにも見置ずて何にくらゐの山はわくらむ

【六段目】

三月晦太政官代にめされて内国事務権判事といふに補せられける時、こゝろの中に

39　君が為よのためにとて捨し身のなり出る時にあひにけるかな　」（継）

祭楠贈左中将歌並短歌

五月廿五日　勅祭於鴨東于時　皇威日隆東北諸賊　大夷海内

清平可期日也懐今古観今慨然乃賦以献

40 青濤の 八重折澳に 慨みも 隠り坐けむ 常暗は ゆゝしかし
こし 白雲の 重なる山に 恨わび 御世へましける 行宮は す
べもすべなし 斯しのみ 降ちけるよの いかならむ 時にあれか
も 明神 吾大王の 新代を 所知召なへ 古の いつの足世と
梓弓 引かへしぬれ 天知也 日の御旗 高知也 月の御旗の
高ゝに 旗手なびかふ をさかりの 今の現に まつろへる 臣の
かゞみと たゝへ来る 武雄は誰ぞ 湊川 底の埋木 朽果し か
ひやはあらぬ 五百年の 其世思ほし 其勲 かゝげたまへる 今
日しもや 仰ぎまちけむ 楠の くすしきみたま 萬世の 臣の鏡
と いつけ■■■■ 」（継）

反歌

41 天翔つかへんみよと七世までうけひてまちしけふにやはあらぬ 」（継）

諸侯版籍奉還の奏聞を旦■に奉るとて

42 地ならば大君ますと谷ぐゝの知りて幾よを待わたりけん

43 あらたまる野山の春におくれずと花うぐひすもいそぐころかな 」（継）

明治四年元日試筆

44 武蔵の海千重波しける玉しきの都平らに春立にけり

貴賤迎春 御会始

45 朝けぶりかすみそゐつゝ百千足家庭の末になびく春かな

46 梅が香をひとつたもとにつゝみても嬉しさあまる御代の春かな

参議真臣を悼む哥

47 うるはしくさかえむみ代を天翔りみるらん人と成し君はも

ふたゝび貴賤迎春の歌をよめる

48 大寶かきなでたまひ天地のさかゆる春になびく御世はも 」（折）

廿四日御会始に宿所にさもらひて

49 玉ゆらぐをすのつまより花鳥の時めく風もよにやふくらむ

故郷にものしたる夢をみて其暁方

50 帰きとみしはうつゝの梅園にかすむもあはれ故郷の月

花下言志 上巳御題

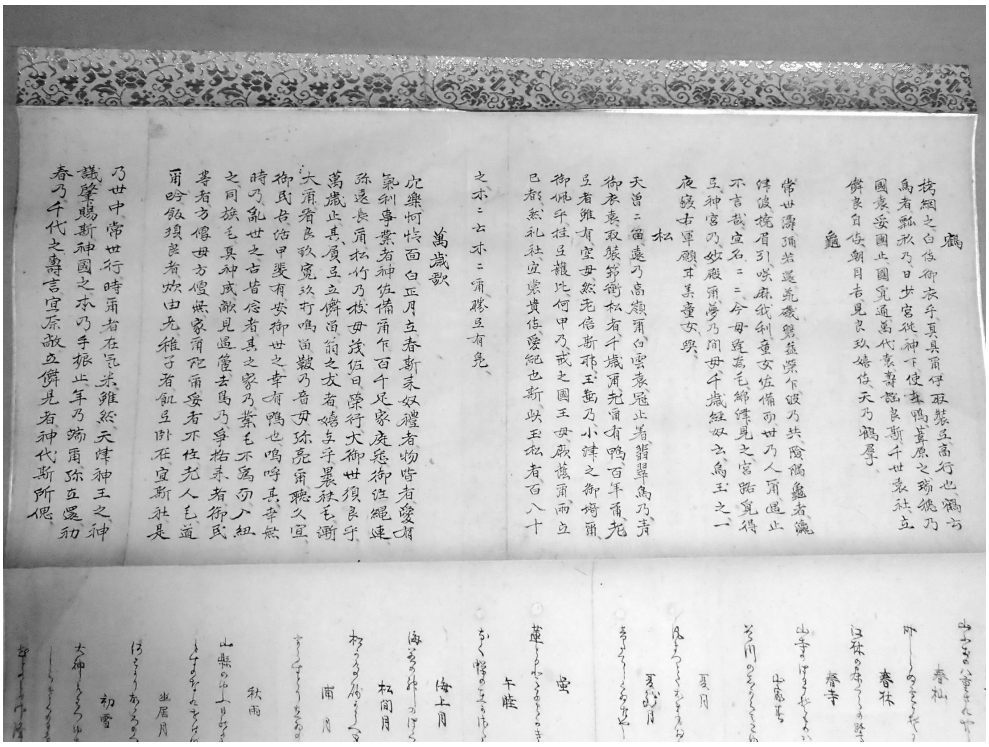
51 さく花に盡すこゝろも大かたの国ぶりならぬみさをならまし

52 桜花みつゝしおもへば大方の恵にもれぬ物无りけり

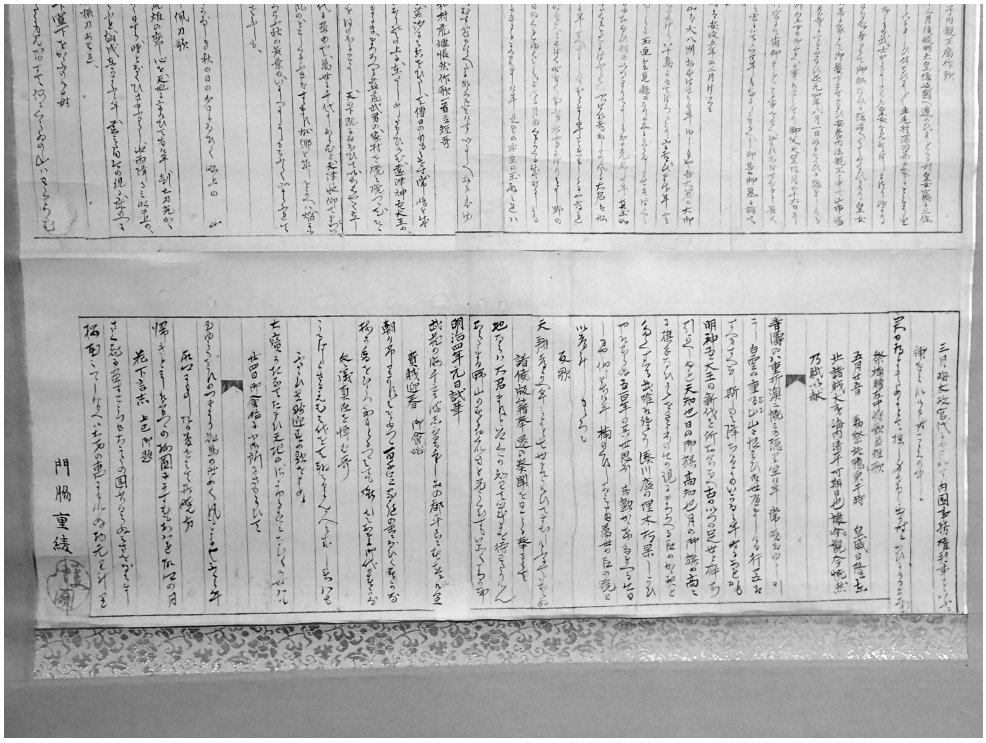
門脇重綾 蠖園（印）

〔付記1〕
本稿は、山陰研究プロジェクト「山陰の文学・歴史関係資料の基礎的調査研究と発信・公開に関するプロジェクト」（二〇二二～二〇二四年度、代表・田中則雄）、科学研究費補助金（基盤研究（C））「近世後期の鳥取の和歌に関する資料調査と総合的研究」（課題番号20K00359代表・渡邊健）による研究成果の一部である。
〔付記2〕
本稿を成すにあたり、貴重資料の閲覧、翻刻と写真の掲載をご許可いただいた原豊二氏に深謝申し上げます。

（参考写真1）



（写真2）



Reprinting and bibliography “A hanging scroll used for the draft of waka poems in Kadowaki Shigeaya's own hand” owned by Professor Toyoji Hara

WATANABE Ken
(National Institute of Technology, Yonago College Department of Liberal Arts)

〔Abstract〕

This paper will offer the reprinting and bibliography of “A hanging scroll used for the draft of waka poems in Kadowaki Shigeaya's own hand” owned by Professor Toyoji Hara. Kadowaki Shigeaya is a classical Japanese literature scholar and a government official in charge of religious ceremonies who served Tottori Domain and the Meiji Government from the end of the Edo period through the Meiji Restoration. It is thought that this material was excerpted from the draft of waka poems written by Shigeaya and mounted in a scroll. Shigeaya’s personal collection of poetry is “Kakuen-syu”, but the poems were selected by others after his death, and there are many things that need clarifying concerning the original source materials and its editing process. Although this material contains only 52 poems, it was written by Shigeaya himself and is an important material in understanding the process of completing “Kakuen-syu”.

Keywords: Kadowaki Shigeaya, The draft of waka poems in one's own hand, Kakuen-syu, Waka poems in the Restoration period at the end of the Edo period